

京都市動物園を訪れる来園者にとってのふれあいグラウンドの役割

土井 穂波

【序論】

近年では、動物園が担う役割として「種の保存」「調査研究」「環境教育」「娯楽」という4つがあるといわれている。動物園研究において、子どもたちが動物園で実際に動物を見ることによって、動物の特徴について詳しくなったり、生息地について理解できるようになったりする効果が実証されている。このように環境教育を担う動物園には、動物に実際に触ることができる展示がある。実際に動物に触る体験は来園者の自然環境や動物に対する意識に影響を与えると考えられるが、実証的な先行研究はない。

本研究では、京都市動物園の敷地内にある直接動物に触れることができる展示施設である「ふれあいグラウンド」(こども動物園と呼ばれることもある)で、来園者がどのように過ごし、何を感じているのかを、行動観察とインタビューによって明らかにすることを目指した。

【研究1】

京都市動物園 おとぎの国にあるふれあいグラウンド(以下、グラウンド)には、カイウサギ(*Oryctolagus cuniculu*)、テンジクネズミ(*Cavia porcellus*)、ミニブタ(*Sus scrofa domesticus*)、ヤギ(*Capra aegagrus hircus*)、ヒツジ(*Ovis aries*)、ロバ(*Equus asinus*)が飼育されており、来園者はミニブタ、ヤギ、ヒツジを自由に触ることができた。

研究1では、どのような来園者がグラウンドに長く滞在し、動物との接触を頻繁に行うのかを検討した。同意を得られたグラウンド入場者(以下、協力者)に年齢、性別、グループ構成、ペットの有無、動物が好きかどうかを尋ね、その後、行動観察を行い、協力者が触れた動物とグラウンド内での滞在時間を記録した。

2014年7月31日から11月13日にかけて14日間の調査の結果、98人の協力者から回答を得ることができた。協力者の属性(年齢層、性別、グループ構成、ペットの有無、動物が好きかどうか)とグラウンドでの滞在時間や動物との接触行動には有意な関連が見られず、滞在時間と動物との接触頻度の個人差を説明する要因は見つけられなかった。協力者の性別や年齢などのグラウンドに入場する前から協力者が兼ね備えた要因ではなく、グラウンドのなかで協力者がどのような体験をするのかということが、協力者の滞在時間や活動内容を決定しているという可能性が考えられた。

【研究2】

研究2では、グラウンド入場者が、グラウンド内でおこなう行動や飼育展示係や同行者との会話に注目した。グラウンド内には、1名の飼育展示係が常駐しており、グラウンド内の清掃を行ったり、来園者に動物に関する解説を行ったりしている。協力者がグラウンドで行った行動や会話が退場時の印象にどのような影響を与えるのか調べることを研究2の目的とした。

同意を得た協力者を対象に行動観察を行い、動物との接触、動物を追う、動物に近づく、動物から離れる、動物に手を振る・指をさす、動物に声をかける、動物の写真を撮る、動物に対して食べられるものを見せる、動物の真似をする、サイン(掲示板)に関わる行動を記録した。また、協力者の会話相手とその会話内容も記録した。協力者がグラウンドを退場したのちインタビューを実施し、「グラウンドを利用した感想」、「最も印象に残ったこと」を尋ねた。調査期間は2015年7月30日から10月29日の21日間で、その間に301人の協力者を対象にインタビュー調査と行動観察を行った。

258人(86%)が「グラウンドを利用して楽しかった」と回答した。協力者が誰かと会話した場合は、誰とも

会話をしなかった場合と比べて、より多くの来園者がグラウンド内で体験したことがらを「最も印象に残っていること」として回答した。また、会話相手が飼育展示係の場合は、同行者と会話した場合と比べて、多くの来園者がその会話内容を「最も印象に残っていること」として回答した。よって、飼育展示係との会話が、協力者にとってグラウンドでの体験をより印象深いものにしており、体験の言説化に繋がっていることが示された。さらに、グラウンド内に飼育展示係がいることや飼育展示係との会話によって、協力者の動物への接触行動や「動物に近づく」「動物に手を振る・指をさす」「サインに関わる」といった動物に関わろうとする行動が有意に増加した。これらの結果は、飼育展示係の存在や飼育展示係との会話が動物に対する協力者の興味を高めていることを示している。飼育展示係が来園者に話かける内容を適切に選択することによって、動物園がグラウンドを通して、来園者に知ってもらいたい内容をより効果的に伝えることができるのではないかと考えた。

【研究 3】

動物園学に関する講義を受ける大学生や大学院生が動物や動物園に対してどのような考え方や興味、関心をもっているか、また講義を受けることでそれらがどのように変化するかを検討することを目的とし、受講者(以下、協力者)に動物園についてのアンケートを行った。京都市動物園の職員が非常勤講師として、大阪大学人間科学部で実施した集中講義を受講した 20 代の学部生と大学院生計 19 人を協力者とした。

19 人の協力者全員が動物の保全を動物園の役割として認識しているものの、来園者が動物園に来る理由としては娯楽が重要視されていると考えていることが示された。また、講義内容を聞くことによって「動物園で動物を飼育することに賛成ですか」「動物園の動物は幸せだと思いますか」「動物園のサポーターやボランティアになろうと思いましたか」「動物園に寄付をしようと思いましたか」などの質問項目に対して、「どちらでもない」といった回答が減少したことから、協力者がアンケート項目に対して自分の考えをもって判断することが可能になったと言える。つまり、講義は協力者にとっての判断材料を増やし、協力者が自分の意志を決定するために重要な役割を果たしていると考えられる。

【総括】

来園者はふれあいグラウンドに入場し、滞在中に、飼育展示係や同行者と会話をして楽しさを感じていることが、明らかになった。つまり、ふれあいグラウンドは、その中での会話や行動を通して、結果として来園者に教育効果もたらされる、「教育とは言わない教育」を実践することのできる場所であると考えられる。また、来園者がもつ動物や動物園に対する認識を変えるためには、飼育展示係や教員といった専門家の存在が重要であることも明らかとなった。(比較行動学)